

ホルスタイン子牛における下痢症の診断・治療について - 獣医師アンケートの結果から -

河合 一洋 十勝 NOSAI

[はじめに]

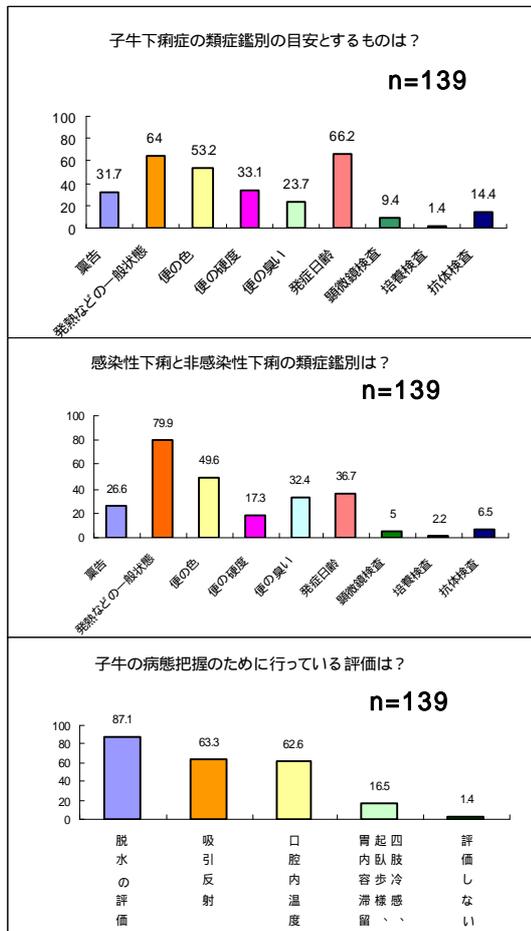
平成 16 年度より子牛共済が始まり、私達 NOSAI 獣医師も子牛の感染症について、より深い知識が要求されるようになってきた。子牛の感染症の中でも腸炎は、感染因子、飼養環境、管理状況など発症要因が多岐にわたるため、感染予防の方法や感染後の対応の良し悪しによって発生率や治療率が大きく左右されると考えられる。平成 17 年度の十勝管内における子牛腸炎の発生率は 9.1%、その治療子牛の死廃率は 17.7% に上っており経済損失は大きいといえる。また死廃率には、地域によって大きな格差が認められている。これまで、子牛の下痢症については、診断・治療法が提示されているにもかかわらず、それが広く普及し正しく理解されていないのが現状である。

今回、子牛の下痢症の診断・治療について、現状を把握しそれを今後の診断・治療に活かしていくために、十勝 NOSAI の 13 診療所の 159 名の獣医師に対して、サルモネラ、コクシジウム症を除く子牛の下痢症の診断・治療・予防に関するアンケート調査を実施した。139 名より回答が得られ、その結果を診療所または獣医師の年齢層ごとに分析を行った。

[下痢症の診断について]

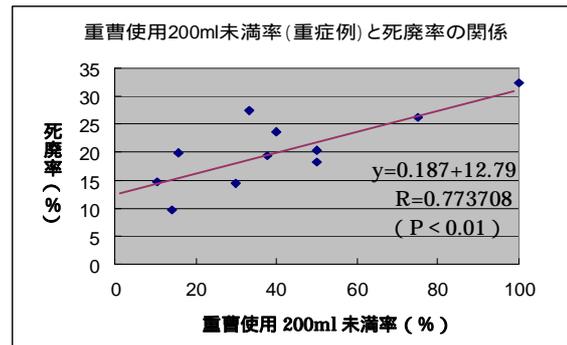
日頃、私達は子牛の下痢を診療した時に、何による下痢なのか子牛の状態だけを見て判断することを強いられている。下痢の感染因子と発症日齢は関係が深いことが知られている。「下痢の類症鑑別の目安としているものは何か」の質問に対し、発症日齢、発熱などの一般状態、便の色と答えた人が多く、特に若い獣医師において発症日齢を

診断の指標にしている傾向が強かった。また、感染性下痢と非感染性下痢の区別については、約 8 割の人が発熱などの一般状態を診断の指標としており、特に年配の獣医師ほどその傾向が強かった。「病態把握のために行っていることは何か」という質問に対しては、6 割以上の方が脱水の評価、吸引反射、口腔内の温度をあげており、続いて四肢冷感、起臥歩様状態、胃内容滞留状態であった。また、吸引反射と口腔内温度の評価を行っている獣医師が、それぞれ 20 代が 88%、76%、30 代が 92%、85% であったのに対し、40 代は 55%、53%、50 代以上は 47%、56% と少なかった。



[下痢症の治療について]

一般的な軽症例（軽度脱水、自力哺乳可能の場合）と重症例（重度脱水、自力哺乳不可能の場合）に分け、その治療法について質問したところ、軽症例では、半数近くの人が生菌剤、抗生剤の経口投与と経口電解質の投与を行い、その他は生菌剤または抗生剤の経口投与のみで治療していると答えていた。重症例では、8割の人が生菌剤、抗生剤の経口投与と静脈内輸液と答え、その約半数が経口電解質の投与を併用していた。静脈内輸液の内容については、等張糖加リンゲル、または5%ブドウ糖とB₁加リンゲル、または5%ブドウ糖と生食のいずれかに25%ブドウ糖、重曹、高張食塩、ベルベリン、アルギメート、Vit.B₁などを加えていた。重症例における総輸液量は、700～6200mlであった。静脈内輸液の速度については、約8割の人が症状に合わせて調節すると答えていた。第一次選択薬で使用する抗生剤注射薬の種類については、カナマイシンが79%、オキシテトラサイクリンが11%、アンピシリンが7%であった。断乳については軽症例に比較し重症例において多く実施する傾向にあった。腸炎に対するステロイドおよび非ステロイド製剤の使用率は、それぞれ15%、13%と低かった。重症例での代謝性アシドーシスの改善のための重曹の投与は下痢の輸液を考えるにあたりたいへん重要である。しかし、現状は、使用量に大きな差が認められた。そこで、重症例において7%重曹注の使用量が200ml未満の人の各診療所に占める割合と診療所ごとの死廃率の相関を見たところ、右のグラフに示すような有意な相関が得られた。また、7%重曹注の200ml以上使用率が、20代が88%、30代が84%であったのに対し、40代が56%、50代以上が58%と低かった。



[下痢症の予防について]

日頃の農家による子牛の管理状態が、子牛の下痢の発生に大きく影響していることはいうまでもなく、下痢を予防するためには、いかに清潔かつ適正な管理の下で飼育され、またいかに早期に異常を発見し対応できるかにかかっているといても過言ではない。「予防のためにどのようなことを指導しているか」という質問では、子牛の衛生環境が81%、初乳の給与が69%、子牛の飼養施設が50%という結果であった。自家治療については、軽症例では、経口電解質の投与に生菌剤または生菌剤と抗生剤が最も多く、重症例では、上記の治療をさせると同時に獣医に診療依頼させるという答えが最も多かった。また、「農家からよく聞かれることは何か」という質問で多かったのは、経口薬の投与方法や断乳についてであった。このことについては獣医師間でも見解に大きな相違があり、それが農家の戸惑いを招く原因にもなっていると推察された。

[まとめ]

今回の調査で、子牛の下痢症に対する個々の獣医師の技術だけでなく意識においても大きな相違があることが浮き彫りになった。また、子牛の下痢症の予防・治療に対する自己診断においても、獣医師の3人にひとりが不安または苦手であると答えていた。今後、この結果を真摯に受け止め、改めて勉強会を実施するなどして獣医師個々の研鑽に努めていきたいと思う。